

5 近江の鬼瓦

北村 圭弘・福庭万里子・岡山 仁美

A はじめに

滋賀県は近江一国からなる。近江には、古くから学界によく知られた鬼瓦があり（八島廃寺、小八木廃寺、安土廃寺、南滋賀町廃寺など）、個別には遺跡ごとの報告もある。しかしながら、これまでに近江出土の鬼瓦という観点で、その全体像が示されることはなかった。今回、はじめて鬼瓦の集成を試みたところ、近江における鬼瓦出土遺跡は 23 遺跡にのぼることがわかった。

本稿では、近江における鬼瓦の分布状況と遺跡ごとの概要を北部と南部とにわけて報告する。
(北村圭弘)

B 近江国北部

近江国北部として高島郡（湖西地域）、伊香郡、浅井郡、坂田郡（以上、湖北地域）、犬上郡、愛知郡、神崎郡、蒲生郡（以上、湖東地域）を扱う。この 8 郡における鬼瓦出土遺跡数は浅井郡 1、坂田郡 2、犬上郡 1、愛知郡 2、蒲生郡 3 の 5 郡 9 遺跡である。出土した鬼瓦は安養寺廃寺の飛雲文鬼瓦と鬼面文鬼瓦、野瀬遺跡の鬼面文鬼瓦が奈良時代であるほかは、いずれも白鳳期の所産と考えられる。

i 八島廃寺（浅井郡：長浜市八島町）

『日本書紀』天武天皇元年（672）8 月 25 日条によると、壬申の乱に勝利した大海人皇子は、近江朝の「右大臣中臣連金を浅井の田根に斬る」とある。この「浅井の田根」こそ八島廃寺付近とされている（西田 1989、p. 567）。当地は近江の南北と美濃、越前とをむすぶ交通の要衝（T 字路）にあたる。

鬼瓦 1・2 八島廃寺の鬼瓦はこれまでに同範の 2 点が知られる（第 1 図）。鬼瓦 1 は吉田神社（京都市左京区神楽岡）の有力社家鈴鹿家に伝来した。鈴鹿家は上述の中臣連金の子孫とされ（加茂 2006、p. 252）、「鬼瓦は戦利品」との伝承があるらしい¹。鬼瓦 2 は奈良国立博物館蔵品である。これは昭和 44 年（1969）頃に八島廃寺付近の住民から井内古文化研究所へ譲渡され（井内 1969、p. 23）、それがさらに平成 26 年（2014）に奈良国立博物館に譲渡された（吉澤 2015、p. 12）。

2 は焼成がやや軟質で、色調は灰褐色で、表層のみ灰黒色を呈する。胎土には砂粒や小

礫が目立つ。これらの特徴は八島廃寺出土瓦全体に共通する特徴である。鬼瓦が伝世品ないし採集品であるとしても、おそらくは近傍の八島瓦窯跡付近で生産され、確かに八島廃寺所用であったと見てよいであろう²。

文様 平面形状は方形で、2は縦 21.5cm、横 23.2cm を測る。大津市南滋賀町廃寺所用の方形軒丸瓦とはほぼ同形同大である³。裏面に丸瓦部（方形瓦の可能性）の接続痕があり、かつ両者は全体形状もよく似るが、八島廃寺からは方形瓦（軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦）は出土していない。文様にも側視蓮華文（いわゆるサソリ文）は知られず、鬼瓦の主文は有子葉単弁8葉蓮華文である。八島廃寺出土の山田寺式軒丸瓦の瓦当文様とよく似るが、中房の蓮子配置は軒丸瓦が中央に1個のみであるのに対し、鬼瓦は「1 + 6」である⁴。方形の外縁には平縁がめぐり、それと蓮華文との間には、尖った頭頂を四隅に向けた人面が配置される。面貌は目尻がさがっており、笑顔に見える。

固定方法 鬼瓦の下半部には半円形の削り形がある。大棟所用である。この削り形は焼成前に削ったのだろうが、裏面には焼成後の打ち欠きらしき痕跡がある。2の中房中央には小孔がある。1は同位置に小孔がなく中心蓮子がある。後者についても小孔は貫通していないので釘孔ではない。裏面にはともに丸瓦部（方形瓦の可能性）の接続痕があることから、井内功氏はこの鬼瓦の固定方法について、関根龍雄氏の嵌込式（関根 1940）にヒントを得て被覆式とし、「筒瓦で棟端を被覆して固定した」と考えている（井内 1969、pp. 22～25）。

ii 磯堂谷遺跡（坂田郡：米原市磯）

琵琶湖上交通の要港朝妻港の南側の磯山東麓にある。寺院跡とされるが、「古瓦出土地を発掘せしに、数多の平瓦傾斜面に層をなして埋没されたり」というから（坂田郡教育会 1941、p. 853）、窯跡の可能性もあるだろう。地元住民の採集品である長浜城歴史博物館寄託品リスト記載の鴟尾4点のうちの1点が鬼瓦とみられる（第2図）。

鬼瓦 1 鬼瓦の全体形状は不明ながら、平面形状は二辺が直角の隅角をつくる板状で、円孔ないし削り形の一部の痕跡が遺存する。大きさから見て、鴟尾も鬼瓦も大棟所用と見られる。裏面は素文である。表面には側縁平行の突帯と下端縁並行の突帯がT字状ないし十字状に交差し、前者が後者の上に被さるように表現される。突帯幅は 2.5cm 前後で、高さは 0.2～0.4cm と低い。突帯は粘土の貼り付けでなく、削り出しているようにみえる。この特徴は鴟尾片の突帯と同じである。胎土は砂粒を少量含む細かい粘土で、焼成はやや軟質、色調は暗灰色から灰褐色である。この特徴も鴟尾片と共通する。

iii 三大寺遺跡（坂田郡：米原市枝折）

古代東山道沿いにある。寺院跡とみられる。壇越は息長丹生真人氏に比定される。昭和 57～58 年（1982～1983）の発掘調査によって基壇跡がみつきり、山田寺式軒瓦が大量に

出土した（米原町教育委員会 1984）。基壇跡は削平されていたが、四周で雨落溝跡が検出され、隅棟所用の鬼瓦が出土しており、基壇跡上には四面庇の建物があったことがわかる。また、基壇跡は東西溝跡間約 24 m、南北溝間跡約 21 m と、平面形状がほぼ方形であることから、四面庇の建物跡は塔跡であった可能性がある。

鬼瓦 1 鬼瓦は 1 点が出土した。完形品である（第 3 図）。上端幅 22.5cm、下端幅 20.5cm で、厚みは 3.0cm である。下半部の中央に幅 10.0cm の半円形の抉り形があり、その両側にも抉り形があることから、隅棟所用であることがわかる（木村 1941）。表面は素文、裏面には固定するための環状把手がつく。焼成はやや軟質で、色調は灰色である。胎土には砂粒や小礫が目立つ。これは三大寺廃寺出土の山田寺式軒瓦等に共通する特徴である。

iv 鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡、犬上郡：彦根市正法寺町）

古代東山道鳥籠駅の比定地の近くに位置する。遺跡南西側の大堀山は壬申の乱の戦場「鳥籠山」（『日本書紀』天武天皇元年（672）7 月 9 日条）に比定される。平成元・3 年度（1989・91）の発掘調査で、西向きの緩やかな斜面地から灰原等が検出され、未焼成品を含む大量の瓦等が出土した（彦根市教育委員会 1992）。出土した軒丸瓦は山田寺式が最も多いが、川原寺式等もある。軒平瓦には四重弧文や平城宮式等がある。

鬼瓦 1 鬼瓦とみられる破片は 1 点である（第 4 図）。平面形は楕円の長軸に沿って切り取ったような半円形である。厚みは 3.0～5.1cm で直線（長軸）面側が厚いことから、製作時にはこの箇所を下端面としたと推定できる。下半部に抉り形は観察できない。成形は下端面に並行にして粘土紐を積み上げ、両面に平行叩きを施した後、周囲を調整したと見られる。焼成はやや軟質で、色調は表層のみ褐色、断面は黒色である。胎土は緻密で、砂粒は目立たない。

v 下岡部廃寺（愛知郡：彦根市下岡部町）

天平勝宝 3 年（751）の東大寺領「近江国霸流村墾田地図」に記載される「大村寺」に比定される（高橋 2007、pp. 191～192）。大正 13 年～昭和 11 年（1924～1936）の耕地整理の際の採集品（石田 1937）や平成 6 年（1994）の発掘調査の出土品（滋賀県教育委員会 1997）には山田寺式、川原寺式、檜隈寺式の軒丸瓦などと、四重弧文や平城宮式の軒平瓦などがある。

鬼瓦 1 鬼瓦とみられる破片は 2 点ある（第 5 図 1・2）。1 の側面はヘラ削りであり、下端面の側面側は斜めに削られる。下端面は破損しているが、隅棟所用の抉り形があるようにも見える。主文は一辺約 4.2～4.6cm の正方形（□）の四方を棒線（—）で囲んだような連続文様で、外縁には平縁がめぐる（幾何学文鬼瓦）。2 は平縁がめぐるから外縁部の破片である。1 の表面には糸切り痕がある。粘土板を糸切りで切り出して、范に打ち込んで施文したと考えられる。焼成はいずれもおおむね堅緻で、色調は灰色である。胎土には砂

粒と少数の小礫が含まれる。

vi 小八木廃寺（愛知郡：愛荘町小八木）

宇曾川中流域に所在する。湖東式軒瓦の集中分布地であり、小八木廃寺も依智秦氏の氏寺の一つとされる。鬼瓦は昭和 49 年（1974）の発掘調査時に「ほ場整備の残土処理の際、幹線水路排土中より出土した」という（滋賀県教育委員会 1976、p. 79）。

鬼瓦 1 鬼瓦は 1 点がある（第 6 図）。下端部を欠損するが、完形に近いと見られる。平面形状はほぼ長方形で、全長は 30.2cm 以上である。幅は 22.4 ～ 24.0cm 以上で、上端幅が狭く下端幅がやや広い。下半部に挟り形はなく、裏面は平坦で固定装置はない。焼成は堅緻で、色調は淡い青灰色である。胎土は砂粒を含むが、おおむね精良である。

文様 鬼面の輪郭は U 字状で、額上が緩やかな山形になる。眼は目尻がつり上がる涙滴形で、瞳孔と虹彩とをあわせて円形に表現する。眉毛は山羊角状に盛り上げ、鼻は鼻筋が高く通り、鼻翼が締まりつつひろがる。そして、横一文字に結んだ唇間から長く舌を垂らす。

製作技法 表面の鬼面部分には木目や彫刻痕の反転痕があることから、この箇所は明らかに範作りである。そして鬼面部分以外の箇所はナデ調整されるため、鬼面部分のみが範作りとされている（滋賀県教育委員会 1976、p. 79／山本 1998、第 17 図解説⁵）。そこで端面や破面を観察すると、全体に長方形の粘土板を重ねたように見える。また、裏面を観察すると、まばらながらも全面に工具による叩き締め痕ないし押圧痕が認められる。そもそも鬼面部分のみを範作りとし、それを型（範）を用いずに別の粘土板と接合する場合、両者の乾燥状態（共土、生乾き）にかかわらず、顕著な接合痕がのこるはずである。しかし、それは観察されない。おそらく範の平面形状は鬼瓦の全形と同様の長方形の厚い板で、そこに鬼面部分を彫刻していると考えられる。したがって、その製作工程は次のように推定できる。まず長方形の範を下にして鬼面部分に粘土を詰め込み、引きつづき範面（鬼面の彫刻面）にあわせて粘土板との接合面を調整する。そして、そこに長方形の粘土板を重ねて接合した後、裏面の全面を叩き締めないし押圧する。その後、生乾き段階で範からはずし、鬼面の眉毛下や口周り部分、鬼面と粘土板との接合部分、その他鬼面周囲の素文部分をナデ調整し、最後に四周と側端縁（裏面の上端縁を除く）をヘラ削りして仕上げたと推定できる。

vii 安土廃寺（蒲生郡：近江八幡市安土町下豊浦ほか）

安土山周辺では複数箇所では古代瓦の出土が知られる。鬼瓦は 2 点がある（第 7 図 1・2）。昭和 25 年（1950）に安土山北端の東側山麓の大中の湖干拓地で採集された。

鬼瓦 1 第 7 図復元図は梅原末治氏が韓国慶州出土品を参考に考案し（梅原 1951⁶）、のちに修正した（宇野 1953⁷）。今回これに拓本を貼り付けた。復元値は全長約 27cm、下端幅約 35cm で、厚さは実測で 4.0cm と 4.3cm である。外縁に平縁がめぐる蓮華文鬼瓦であ

る。蓮華文は緩い鎬をもつ素弁8葉で、間弁も鎬をもつ二等辺三角形状である。中房の蓮子は「1 + 6」で周環はないと見られる。蓮華文は縦3列、横2列で都合6個半を全面に配置し、上下に隣接する蓮華文間には下端縁に並行する二重棒線「=」を配置している。中央上の蓮華文が下半分しかない理由は、中央下に半月形の挟り形を復元したためである。この挟り形は大棟用である。

1は焼成がやや軟質で、色調は灰褐色でありやや磨滅している。2は焼成が堅緻で、色調は黒褐色である。裏面には側縁に並行するヘラ削りがある。いずれについても裏面の側縁は丸く仕上げる。また、胎土は砂粒を含むが、おおむね精良である。

viii 安養寺廃寺（蒲生郡：近江八幡市安養寺町）

日野川下流域の南岸に位置する。南側には東山道が通過する。平成25～26年（2013～14）の発掘調査で、南北方向の溝から大量の瓦片が出土したほか、寺域の南限とみられる東西方向の柵も見つかった（滋賀県教育委員会2017）。鬼瓦には飛雲文鬼瓦と鬼面文鬼瓦がある。

鬼瓦1・2 飛雲文鬼瓦である。鬼瓦1は発掘調査で同一個体とみられる破片8点が出土した（第8図1～5）。近江国府跡出土の鬼瓦A3と同範で、木村捷三郎氏が昭和4年（1929）に安養寺廃寺で採集した鬼瓦2（第8図6）は鬼瓦1とは同範別個体とされる（滋賀県教育委員会2017、pp.104・147）。いずれも近江国府跡出土品と同様に焼成が軟質で、灰白色を呈している。なお、安養寺廃寺では飛雲文鬼瓦と一本作り丸瓦が出土するが、飛雲文軒瓦は出土していない。

鬼瓦3 鬼面文鬼瓦とされる小破片2点が発掘調査でみつかった（第8図7・8）。7の破面には棒状粘土を差し込んだ痕跡がある。角ないし牙といった突起箇所とされ、突起の基部にはヘラ描きの沈線がある。表層は灰黒色で、破面は灰褐色ないし淡灰黒色である。胎土はおおむね精良である。8は厚さ3.8cmの粘土板に突帯を貼り付けている。表層は灰褐色で、破面は灰褐色ないし淡灰黒色である。胎土は砂粒を含むが、おおむね精良である。

ix 野瀬遺跡（蒲生郡：東近江市宮井町）

日野川中流域に位置する。宮井廃寺の周囲を野瀬遺跡という。野瀬遺跡のなかに宮井廃寺があるといってもよい。昭和58～59年（1983～84）に発掘調査が実施され、第5地区のB地区西端の斜面地を中心に大量の瓦片が出土した（蒲生町教育委員会1989）。

鬼瓦1 鬼面文鬼瓦とされる破片1点が発掘調査でみつかった（第9図）。向かって右側の眉毛周辺で、一部に側面がのこる。眉毛の形状は平城宮ⅡA式に類似するよう見え、頭髮も斜方向に表現されるが、その断面形状は半円形である。範づくりである。厚みは4.9cmをはかる。裏面の一部に顕著な指頭圧痕がつくほかは、側縁に平行してヘラ削りするようである。焼成はやや軟質で、表面の表層はやや黒くくすむが、全体に灰褐色を呈する。

【参考】柿田遺跡（坂田郡：長浜市東上坂町）

姉川中流域に所在する。古墳時代に発達する大集落遺跡で、同後期以降に渡来系遺物の出土が顕著となる。昭和 62～63 年（1987～88）の発掘調査で、多数の瓦類とともに鬼面文軒丸瓦 2 点が出土した（滋賀県教育委員会 1989）。鬼瓦関係資料として参考までに取り上げておく。

鬼面文軒丸瓦 外縁に三重圈文がめぐるなかに、鬼面文が配置される（第 10 図）。鬼面の眼は杏仁形で目尻はつり上がり、瞳孔と虹彩をあわせて円形に表現する。そして、左右の眉毛の両端と上側にはそれぞれ 3 単位の蕨手状の卷毛があり、眉間から上に延びるさしば形の額飾りの左右両側にも角ないし蕨手状の卷毛が表現される。口の下唇は重圈文の内縁に沿い、上唇は M 字状を呈して大きく開く。口内の上下左右には奥歯 2 本と前歯 4 本、その間に犬歯 1 本ずつが配置され、前歯と犬歯には歯茎が表現される。鼻は小さく丸く、鼻翼も丸い。瓦当面径は 17cm をはかる。

使用方法 柿田遺跡出土軒丸瓦の瓦当文様は奈良県地光寺跡出土軒丸瓦と単位文様が一致する一方（同文）、文様の立体感は失われて平板である（異範）。地光寺跡と同範の軒丸瓦は奈良県大官大寺跡と川原寺跡で出土している。このいずれの遺跡においても、鬼面文軒丸瓦の出土点数は少ないので、降棟や隅棟の先端などの屋根の要所にのみ葺かれたと見られている（岩戸 2015b、pp. 229～230）。出土点数の少なさは柿田遺跡においても同様である。鬼瓦を棟端飾りとみれば、鬼面文軒丸瓦は瓦当文様とかかわって、使われ方もそれに近かったと考えられる。（北村圭弘）

C 近江国南部

近江国南部として野洲郡、栗太郡、滋賀郡（以上、湖南地域）と甲賀郡を扱う。この 4 郡における鬼瓦出土遺跡数は野洲郡 2、栗太郡 6、滋賀郡 6 の 3 郡 14 遺跡である。このうち野洲郡と栗太郡北部では白鳳期の鬼瓦が出土し、滋賀郡と栗太郡南部では奈良・平安時代の鬼瓦が出土する。なお、甲賀郡からは今のところ鬼瓦は出土していない。（北村圭弘）

i 六条薬師堂遺跡（野洲郡：野洲市六条）

琵琶湖岸より内陸側へ約 2 km に位置する自然堤防上に立地する。白鳳寺院跡と考えられている。野洲市（旧：中主町）六条には、奈良時代初期創建と伝わる兵主神社が所在することから、『近江の古代寺院』では西田弘氏によって「兵主廃寺」と仮称されている。昭和 55 年（1980）より調査され、特に第 1 次調査では寺院基壇部とみられる南北約 11 m 以上×東西約 6 m 以上の高まり（周囲との比高差約 0.4 m）が検出され、それを囲うように約 6 m の幅で散乱した瓦類が出土した（野洲市教育委員会 2006）。出土した瓦類は平瓦、

丸瓦、単弁八弁蓮華文軒丸瓦、偏向唐草文軒平瓦、鬼瓦である。

鬼瓦 1 鬼瓦は1点が出土した（第11図）。左上部分の破片で、文様は同遺跡で出土した軒丸瓦の範を用いた蓮華文である。周縁部に方形の剥離痕が残るほか、瓦範を使用した際に接触したと思われる痕跡が方形の剥離痕と蓮華文の間に存在する。周縁側面は頂点部分に布目痕が残るほか、ケズリ調整により仕上げる。厚みは約3.8cmを測る。色調は灰色、胎土は2mm以下の砂粒が混じり、焼成は良好である。

文様 同遺跡で出土した軒丸瓦（第12図）は、基本構成として単弁八弁蓮華文で外区の圏線上に珠文を置き、外区外縁に鋸歯文を配する。突出した中房に1+6+6の蓮子と圏線上に18個配する。花卉表現については八弁のうち中房を中心として十字に配した四弁が花卉内側に3本の凸線を有する。ほかに一弁が1本の凸線を有し、残り三弁は花卉の輪郭のみの表現となるものを「Aタイプ」とする。花卉のいずれにも3本の凸線が表現され、中房輪郭を凸線で表し、1+5の蓮子と圏線上に31個の珠文を配するものを「Bタイプ」とする。このうち珠文の有無や蓮子の数・配置など細部の違いでさらに細分される。このうち、鬼瓦に使用された文様は珠文の密度から判断して、珠文が圏線上に18個配されたAタイプとみられる。

ii 八夫西ノ後遺跡（野洲郡：野洲市八夫）

八夫集落中央部西側に位置する。鷗尾の破片や平瓦片が出土したことや周囲の条里方向と異なる地割が現存することから古代寺院跡の存在が推測されている。平成6年度（1994）の発掘調査において、287㎡の調査区で飛鳥・白鳳、奈良時代から平安前期にかけての柵、土坑、ピット、礎石が検出されている（中主町教育委員会1997）。鬼瓦片のほか平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・隅切瓦なども出土しているが、廃絶後にまとめて廃棄したものとみられている。

鬼瓦 1 右上部の破片か（第13図1）。厚さ約3.5cmを測り、表面の一部に、断面台形状・厚さ0.5cmの凸帯を弧状に貼り付ける。さらに外側の部分にも剥離痕がわずかに残ることから、2条以上の突帯が貼りつけられていたものとみられる。裏面に立ち上がりの痕跡が指頭圧痕とともに残る。色調は灰白色を呈し、胎土は2mm以下の微砂粒を含み焼成はやや軟質である。

鬼瓦 2 小破片であるため全容は不明である（第13図2）。裏面の立ち上がりからみて、部位としては鬼瓦下部の破片と判断できる。厚さ約3.6cmを測る。色調は灰白色、胎土は2mm以下の微砂粒を含み、焼成は良好である。

iii 観音堂廃寺（栗太郡：草津市下寺町）

天神社・観音堂境内を中心とする古代寺院跡である。北に隣接する常教寺、観音堂境内には半球状の孔を穿った花崗岩の礎石が点在している。過去の発掘調査成果から、二町四

方の寺域を持つことが推測される。伽藍配置等は礎石や瓦の散布傾向からの推測にとどまる。

鬼瓦 1 報告書（滋賀県教育委員会 1978）では「隅木端瓦」の右上隅もしくは左下隅の破片とされているが（第 14 図）、鬼瓦の可能性があるのでここで紹介する。厚さは約 4.9cm、残存する花卉の長さは 4.9cm、幅 5.0cm を測る。弁中央には稜線を有し、弁端はわずかに反り返る。外区には、同遺跡内で出土している軒丸瓦 II B 類（複弁八弁蓮華文、傾斜縁に面違鋸歯文）と同じ、面違鋸歯文を施文する。側面の瓦当面よりの部分に凸線が残り、瓦範を使用した際の痕跡とみてとれる。裏面には補充粘土の痕跡が残る。色調は灰色を呈し、胎土は緻密で焼成は良好である。（岡山仁美）

iv 近江国府・近江国庁跡（栗太郡：大津市大江三丁目・大江六丁目・三大寺）

大津市の瀬田川東岸に広がる奈良時代の近江国府関連遺跡では、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦に飛雲文が使用される。大津市域の飛雲文瓦には、近江国府系と南滋賀町廃寺系（後述）がある⁸。

近江国庁の政庁建物は、昭和 39 年度（1964）に発掘調査が実施され、1977 年に報告された。鬼瓦は、大中小 3 種類の飛雲文、4 種類以上の異なる鬼面文が出土した（滋賀県教育委員会 1977a）。政庁建物は瓦積基壇で、築地塀に囲まれた空間の中に、正殿とその北側の後殿、正殿の東西両側から南にのびる脇殿が左右対称に配置されていた。8 世紀中頃に造営され、10 世紀末頃まで続いたと考えられている。また、政庁の東に隣接して、同様に築地塀で囲まれた区画が確認されており、政庁を中心に東西郭が並ぶとみられている。

鬼瓦 1～5（飛雲文） 近江国庁および周辺関連施設から出土する飛雲文鬼瓦は、全体の文様構成はほぼ同様で、蓮華文や飛雲文の細部の表現や大きさが異なる大・中・小の 3 種類（A 1・A 2・A 3）に分けられている（滋賀県教育委員会 1977a）。

全体はアーチ形で、上端部の両側に段（切り欠き）を持つ。挟りは中央と左右両端にある。文様は、中央に複弁八弁蓮華文、その周囲に大振りの飛雲文を配置する。蓮華文の両脇下方には雲頭を下に向けた飛雲文を各 1 個置くが、雲頭が内側を向くものと、外側を向くものがある。内外区は突出する二条の界線で区切られる。外区には、雲頭を下方外側に向けた飛雲文が、上部から左右対称に 5～6 個ずつ配置される。中房中心に直径約 1.5cm の円形の釘孔がある。いずれも胎土は密で、焼成はやや軟質である。色調は、内面が灰白色で、表面が灰色～暗灰色になるものが多く、にぶい黄橙色系になるものもある。

今回、近江国府・近江国庁跡およびその隣接地での出土品のうち、既報告の A 1（大）・A 2（中）・A 3（小）に該当すると考えられるものをそれぞれ鬼瓦 1・鬼瓦 2・鬼瓦 3 とし、この中に含まれないものを鬼瓦 4・鬼瓦 5 とした。

鬼瓦 1（第 15～16 図）は出土例が少ないが、最も大型になる。蓮華文の径も大きく、外区の飛雲文は左右 6 個ずつになるとみられる。第 15 図は、政庁跡出土品（滋賀県教育委

員会 1977a) で、中央に円形の釘孔がある。厚さは約 5 cm である。第 16 図は、政庁東郭の出土品（滋賀県教育委員会 2004）で、縁に沿って 5 個の飛雲文が残り、頂部にも飛雲文が配置されると考えられるので、外区の飛雲文は左右各 6 個といえる。蓮華文両脇下方の飛雲文は、雲尾の位置から雲頭は内側を向くとみられる。裏面には製作時の同心円叩きや指で押さえた痕跡が残る。厚さは 4.5 ～ 5.5cm。

鬼瓦 2 は、中型のサイズとされるもの。第 17 図は、政庁跡出土品（滋賀県教育委員会 1977a）で最も残りが良く、全長 45.9cm、下端幅は約 49cm と復元できる。厚さは 5.0 ～ 6.0cm ある。文様は肉厚で明瞭に出ており、中房の蓮子は 4 + 8 で間弁の対角線上に整然と配置される。中央には釘孔を開ける。蓮華文両脇下方の飛雲文は雲頭を内側に向ける。外区の飛雲文は左右各 5 個で、頂部では雲尾で向かい合い、その先端が合わさる。内外区を区切る二重の界線は、外縁上部の段に対応する位置でずらされている。

鬼瓦 3 は、小型品とされ、蓮華文や飛雲文は鬼瓦 2 より小ぶりとなるが、全長や下端部幅は 2 とあまり差がないとみられる。第 18 図は、政庁跡出土品（滋賀県教育委員会 1977a）で、下端部幅約 48cm と復元できる。飛雲文の雲頭はあまり横に広がらない。蓮華文両脇下方の飛雲文は、雲頭を外側に向ける。裏面は平坦で、厚さは 4.5 ～ 5.5cm になる。

鬼瓦 4（第 19 図）は、政庁北方から出土した（滋賀県教育委員会 2007）。外区の飛雲文の表現が鬼瓦 1 ～ 3 とは異なり、雲尾の先端が次の飛雲文の雲頭中央あたりに向かって伸びるのが特徴的である。下端部幅は、2・3 と同等か、やや大きくなるとみられる。中房の中心に円形の釘孔をあける。裏面は平坦に整えられる。厚さは 3.5～4.5cm とやや薄い。

鬼瓦 5（第 20 図）は、東郭跡の東側隣接地、遺物包含層からの出土品で、3 点がある（大津市教育委員会 2012b）。3 点いずれも一部のみの破片で、それぞれ鬼瓦 1 ～ 3 と共通点がある一方で当てはめがたい点もあるため、別に一括した。第 20 図 1 は上端部で、界線には外縁の段に対応するずれがみられる。この頂部の飛雲文は小ぶりで鬼瓦 3 に近いが、蓮華文は鬼瓦 1 に相当する大きさになる。第 20 図 2 の蓮華文は鬼瓦 2 に、第 20 図 3 の蓮華文は鬼瓦 3 に相当する大きさとみられ、それぞれ蓮弁の幅が異なる。いずれも残存する厚さ 3.0 ～ 4.0cm 前後だが、裏面は粘土が剥離しており、正確にはわからない。

鬼瓦 6 ～ 10（鬼面文） 鬼面文鬼瓦は、5 種類がある。今回は、政庁跡出土（滋賀県教育委員会 1977a）の B 1 を鬼瓦 6（第 35 図）、B 2 を鬼瓦 7（第 36 図）、B 3 を鬼瓦 8（第 37 図）、B 4 を鬼瓦 9（第 38 図）とし、政庁跡南西地点出土（滋賀県教育委員会 1999）の南都七大寺系鬼面文を鬼瓦 10（第 39 図）とした。

鬼瓦 6・7 は、南郷田中瓦窯出土品（第 32 図）に類似するとされている（滋賀県教育委員会 1977a）。6 は、ずんぐりした鼻と口角を大きく上げ横に広がる口の形状、珠文帯が廻ることなどは似るが、細部は異なり、全体も小型である。あまり肉厚ではないが、頬部をやや盛り上げて表現している。珠文帯には径約 1.5cm の珠文を約 0.6cm 間隔で並べる。裏面に縄状叩き痕が残る。色調は灰色～暗灰色、胎土は密、焼成はやや硬質である。

7は、脚部右側の破片で、飛雲文鬼瓦と同様に中央だけでなく右端にも挟りがある。珠文帯には径約0.8cmの珠文を約0.3cm間隔で並べる。外縁と珠文帯の間には、鵝尾鱗部という正段型と同様の表現がある。後述する石山国分遺跡（第31図）や南滋賀町廃寺（第33図）の出土品と近似する。色調は灰色、胎土はやや砂粒が多く、焼成はやや軟質である。

鬼瓦8は脚部右側、9は下部左側の断片とみられるが、全容は不明である。周縁には径3.5cm程のやや大ぶりの珠文がつくようである。

鬼瓦10は、政庁跡の南西側隣接地で、国庁または国府関連施設にともなう整地の一部とされる整地土層付近で出土した。南都七大寺系鬼瓦の流れをひく。三日月形をした眉に大きく突出した目と鼻孔の開いた鼻があり、口は上の歯牙のみが表現される。縁には珠文帯が廻り、外縁は切られている。直径約1.1cmの小ぶりの珠文を約0.8cm間隔で密に配置する。脚部が欠け、全長と下端幅は不明だが、小型といえる。残存長は22cm（頂部から上歯までは20.7cm）、残存幅26.2cm、厚さ2.7～5.5cmとなる。裏面は平坦で、固定装置はみられない。色調は灰白色～黄灰色、胎土は密で、焼成はやや硬質。崇福寺跡出土鬼瓦1（第40図）と同範とみられる。

v 惣山遺跡（栗太郡：大津市神領二丁目・大江六丁目・八丁目）

惣山遺跡は、近江国庁跡から南東へ約400mに位置する。南北7間（約21m）×東西4間（約6m）の瓦葺礎石建ち総柱建物12棟が、南北300mにわたって連なっていたことが調査で判明した。出土した軒丸瓦・軒平瓦のほとんどは国庁と同じ飛雲文瓦で、国庁にともなう大規模な倉庫群と推定されている（大津市教育委員会2009）。

鬼瓦1（飛雲文） 上記の発掘調査では多くの飛雲文瓦が出土し、鬼瓦は18点が含まれていた。小片が多いが、近江国庁の鬼瓦3（第18図）に一致するものがある（第21図1）。その他、文様の細部や厚さによりさらに分類が可能だが、ひとまず近江国庁鬼瓦3系統とする。大きさは、少なくとも2種類あるようだが（第21図1・2）、大きい方は全長約48cm、下端部幅約50cmと推定される。蓮華文中房は小さく、蓮子は1+8、中央に径1.5cm程の釘孔をあける。厚みは最大で6.0cmある。一方、合成復元で右側下部にあてられた破片（第21図2）は、脚部の幅や挟りの角度が異なり、やや小型品とみられる。色調は灰白色～黄灰色、胎土は密、焼成はやや軟質である。また、倉庫群の北側にあたる遺跡北端とその西側の発掘調査でも、小片であるが鬼瓦3系統の1点が出土している（大津市教育委員会2012a）。なお、鬼面文については今のところ確認されていない。

vi 青江遺跡（栗太郡：大津市神領二～五丁目）

青江遺跡は、近江国庁跡から谷を挟み南へ350m程離れた丘陵平坦面に位置する。調査で確認された築地跡の位置関係から、朱雀路に相当する古代道路が想定されている。その他、遺跡内では複数の掘立柱建物や多量の瓦類が出土している。遺跡北東端の調査では、小規模な被熱面、炭溜まりなど鍛冶関係とみられる遺構が検出された（大津市教育委員会

2014)。

鬼瓦 1（飛雲文） 鍛冶関係遺構の南側に位置する幅 1.2m の東西方向の溝から、多量の瓦や土器が出土し、飛雲文鬼瓦 1 点も含まれていた（第 22 図）。近江国庁の鬼瓦 3 に近いが、雲の表現がやや異なる。また、近江国庁跡や惣山遺跡出土品とは、右側の挟りの角度が異なる。厚さは最大で 6 cm で、裏面は残存する範囲では平坦に仕上げられ、外縁側面は削られている。色調は灰白色で、胎土は密、焼成はやや軟質である。

vii 瀬田廃寺（栗太郡：大津市神領三丁目、野郷原一丁目）

瀬田廃寺は、軒丸瓦・軒平瓦に近江国府系飛雲文瓦を使用しており、国庁と同時期に創建された寺院と推定されている。昭和 34 年度（1959）に伽藍の中心部分が発掘され、四天王寺式伽藍配置をもつことがわかった。隣接する野畑遺跡からは、「国分僧寺」と墨書された土器が出土しており、第 2 次近江国分寺に想定されている。

鬼瓦 1（飛雲文） 近江国府系飛雲文鬼瓦の小片 1 点（第 23 図）が報告されている（滋賀県教育委員会 1961）。近江国庁の鬼瓦 3 に近いと思われるが全容は不明である。

viii 堂ノ上遺跡（栗太郡：大津市神領三丁目）

堂ノ上遺跡は、古代の勢多橋からのびる官道を見下ろす台地上に位置する。近江国庁と同様に、8 世紀中頃～10 世紀前半にかけて存続したとみられ、最初は瓦葺建物が建てられ、後に掘立柱建物に建て替えられたことがわかっている。「承和十一年六月」と刻された平瓦が出土しており、承和 11 年（844）には瓦葺建物があつたことがわかる。推定古代官道との位置関係から、勢多駅家と考えられている。

鬼瓦 1（飛雲文） 昭和 50 年度調査の際に、飛雲文鬼瓦の小片 4 点の出土が報告されている（滋賀県教育委員会 1977b）。全容は不明であるが、外区がやや狭く、雲頭が縁とほぼ接している（第 24 図）。厚さは 4.5～5.5cm である。色調は灰白色～黄灰色、胎土は密、焼成はやや軟質である。

鬼瓦 2（鬼面文か） 昭和 48 年度調査で、鬼面文らしき小片 1 点の出土が報告されている（滋賀県教育委員会 1975b）。周縁の段形状の表現とみられる部分の小片で、厚さ 4.0cm 程である（第 25 図）。近江国庁跡の鬼瓦 7（第 36 図）のような鬼面文鬼瓦の一部であろうか。

ix 南郷田中瓦窯跡（滋賀郡：大津市南郷二丁目）

瀬田川西岸、緩やかに瀬田川に向かって傾斜する丘陵上に位置する平安期の瓦窯である。平成 4 年度（1992）の発掘調査で、平窯 2 基、瓦溜、灰原などが検出された。南郷田中瓦窯と同範の軒瓦は、近江国庁跡、堂ノ上遺跡、石山国分遺跡、南滋賀町廃寺、崇福寺跡などで見つかっている（滋賀県教育委員会 1994、大津市教育委員会 2013）。鬼面文鬼瓦 1 点

がある（第 32 図）。

鬼瓦 1（鬼面文） 近江国庁の鬼瓦 6・7 の類例として紹介された南郷田中瓦窯跡表採の鬼面文鬼瓦 1 点が知られている（滋賀県教育委員会 1977a）。全体はアーチ形とみられ、鬼面は横に広がる大きな鼻と丸い目玉部分を隆起させるが、それ以外はさほど肉厚ではなく比較的平坦な文様表現である。口角を大きく上げて横に広がる口の中に歯牙を、その周辺に渦巻状で髭を表している。上歯のみで下顎の表現はない。外縁は平坦部がなく、珠文帯の外側を突出させる。珠文帯は、径約 0.8cm の珠文を 0.4～0.6cm 間隔で密に並べる。後述する南滋賀町廃寺出土鬼面文鬼瓦の左下部残存部分（第 33 図）と文様が合う。ただし、南滋賀町廃寺出土品は、珠文帯の外側に正段型表現がある点が異なる。

頂部と両側脚部を欠くが、鬼面中央部分での復元幅約 55cm となる。厚さは全体に 5.0～6.0cm 程、突出する鼻の部分で最大厚 8.3cm になる。裏面は平坦で、一部に粘土を薄く貼り付け、その上には縄状叩き痕がみられる。側面裏側を面取りする。固定装置はみられない。色調は黄灰色、胎土は砂粒をやや多く含み、焼成はやや硬質である。

x 石山国分遺跡（滋賀郡：大津市光が丘町・田辺町・国分一丁目）

瀬田川西岸の丘陵先端部に位置する。奈良時代の保良宮、白鳳時代創建で平安時代に近江国分寺となった国昌寺、平安時代の国分尼寺などの所在が推定される遺跡である。藤原宮と同範の軒瓦が出土し、藤原宮へ供給する瓦を焼いた窯跡も見つかっている。

鬼瓦 1（鬼面文） 第 5 次調査（平安時代前期の礎石建物・柱列・区画溝などを検出）で、鬼面文鬼瓦の破片 2 点（第 31 図）が出土した（大津市教育委員会 2013）。第 31 図 1 は頂部先端とみられ、外縁は幅 1.5cm 程で、その内側に段型表現と珠文帯がつく。段型は、頂部先端で段の向きが左右に分かれている。その下の渦巻状の模様とゆるいカーブ線は、鬼面の巻き毛と眉間上部とみられる。珠文は径約 0.8cm で、0.6cm 程の間隔で密に並ぶ。第 31 図 2 は、この鬼瓦の目玉部分とみられる。南滋賀町廃寺出土（第 33 図）や南郷田中瓦窯跡出土（第 32 図）の鬼面文鬼瓦と同様の鬼面文様と考えられる。また、石山寺に同様の鬼瓦片（第 34 図）が伝わる⁹。

xi 南滋賀町廃寺（滋賀郡：大津市南志賀一丁目ほか）

大津宮中枢部建物が検出された錦織遺跡に最も近い古代寺院跡である。昭和 3 年度（1928）・13～14 年度の史蹟調査で確認され、川原寺式伽藍配置の大規模な寺院跡と判明した。白鳳～平安時代末頃までの瓦が出土する。創建は 7 世紀後半の大津宮と同時期か、やや先行するとみられる。創建期の軒瓦は 2 系統あり、側視形蓮華文方形軒瓦が特徴的である。また、川原寺式軒丸瓦も使用している。その後、奈良時代には、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦で飛雲文が採用され（田中 2018）、鬼面文鬼瓦も出土している（柴田 1940）。なお、鴟尾は白鳳期のものがあり、胴部と鱗部に段型を表すものと、無文の 2 種類がある（柴田

1940)。

鬼瓦 1（飛雲文） これまでに5個体が確認されているが、文様構成は1種類で、大きさもほぼ同一とみられる。全体はアーチ形で、下端部はあまり開かない。上部の外縁左右両端に浅く段をつける。内外区を2条の界線で区切るが、近江国府系飛雲文鬼瓦でみられるような、外縁の段の位置に合わせた界線のずれはない。外区には、雲頭を上方外側へ向けた小型の飛雲文を左右6個ずつ並べ、頂部で雲頭が向き合う。内区中央には、稜をもつ単弁十六弁蓮華文を置き、その周囲を8個の飛雲文で囲む。上部から雲頭を下方外側へ向けて左右対称に3個ずつ、下部には雲頭を上方外側に向けて左右対称に1個ずつ配置する。両脇下方には山岳文がある。下端部中央に半円形の袂が入るが、袂の上部位置には直角に区切られた突線が范に出ている（第27図）。また、脚部下端6cm程の無文部分を残す。

5個体はそれぞれ出土状況や裏面調整の特徴が異なるため、以下に個別報告する。

第26図は、昭和3年の調査時に「金堂跡東方の竹林を穿って得た破片を復元したもの」という（肥後1929）。全長約43cm、下端幅約38cmと復元できる。厚さは3.5～5cmある。中房には、固定用に1辺約4.8cmの方形の孔をあけており、蓮子部分は残らない。裏面は全体に指ナデ調整で凹凸が多少ある。色調は灰色～暗灰色で、砂粒をやや含み、焼成はやや軟質である。

第27図は、左側面から下端部の破片で、大正14年度（1925）に滋賀里村の工事で偶然出土したものと伝わる（肥後1929）。下端幅約38cmに復元できる。厚さは3.5～4.0cmで、裏面は平坦に仕上げている。灰白色～薄灰色で、胎土は密、焼成は硬質である。また、昭和13～14年度調査（柴田1940）では、第27図と同様の色調・胎土・焼成で、最大厚さ5.0cmとやや厚みのある左下端部の出土がある。

第28図は、寺域西辺を区画する築地塀にともなう溝の延長線上とみられる溝状遺構から出土した（大津市教育委員会2007）。頂部と脚部を欠くが、残存する中央付近の両端幅は37.8cmである。色調は灰色～暗灰色、胎土は白色砂粒をやや含み、焼成はやや軟質である。裏面は、指オサエによる凹凸が目立つ。また、中房部の蓮子は1+8で整然と並ぶ。中央に方形孔はなく、固定方法が異なるようである。

第29図は、右上端の段が明瞭に確認できる。また、裏面は円形叩きの痕跡が複数重なっている。色調は灰白色～薄灰褐色で、胎土は密、焼成は硬質である。

鬼瓦 2（鬼面文） 昭和13～14年度の調査の際に、1種類の鬼面文鬼瓦が出土した（柴田1940）。既報告に掲載された下端部破片（第33図）の他に、別個体の断片も保管されており、少なくとも2個体がある。南郷田中瓦窯出土品（第32図）、石山国分遺跡出土品（第31図）と同様の文様構成とみられる。下端部幅40cm程と復元できる。色調はにぶい黄橙色のものと灰色～暗灰色のものがある。胎土は白粒砂をやや含み、焼成はやや軟質である。

xii 橙木原瓦窯跡群（滋賀郡：大津市南志賀一丁目）

南滋賀町廃寺の西側では、寺域西辺を区切るとみられる築地堀跡と溝状遺構が確認されているが、この外側隣接地に位置する窯跡である。7世紀後半の登窯5基、奈良～平安時代の平窯5基、工房跡などが確認され、いずれも南滋賀町廃寺の瓦を製作していた。鴟尾片は南滋賀町廃寺の無文の鴟尾にあたる破片約50点が出土し、鬼瓦は飛雲文と鬼面文の2種類が出土した（滋賀県教育委員会 1975a・1981）。

鬼瓦 1（飛雲文） 既報告で8点があり、いずれも南滋賀町廃寺の飛雲文鬼瓦と文様が合う。裏面の調整について、平坦に整えられるもの（第30図1）、円形タタキ痕があるもの（第30図2）、指ナデによる凹凸が目立つもの（第30図3）がある。

第30図1は、中房中心に方形釘孔をあける。厚さは最大6cmである。裏面は平坦に整えられる。内面は灰白色、表面は灰色～暗灰色で、胎土はやや砂粒が低じり、焼成はやや硬質である。第30図2は、外縁を切っており、縁はわずかに前方へ突出させる。側面は平坦に整え裏面側を面取りする。裏面には、南滋賀町廃寺出土品（第29図）と同様の円形叩きの痕跡がある。内面は灰白色、表面は灰色がかかる、胎土はやや砂粒が低じり、焼成は硬質である。第30図3は、文様の線が太く明瞭に出ているが、下部の挟り上部で直角になる突線がなく、面で確認できる。中房に方形釘孔をあける。裏面は指で押さえたことによる凹凸が著しい。内面は灰白色、表面は暗灰色で、胎土には白粒砂が多く低じる、焼成はやや軟質である。

鬼瓦 2（鬼面文） 鬼面文と考えられるが、類例が定かではない。3点出土（第42図）し、右側部分のみである。アーチ型で、下端はほとんど広がらない。復元全長約37cm、下端幅は35cm程になる。上部右側に鬼面の目玉部分とみられる突起がある。中央上部の同様の突起は、眉間の瘤の表現のようにもみえる。上部から内側下方に向かって入る斜め線状の文様は髭の表現であろうか。眉間にあたる箇所直径1.2cm程の穿孔があり、裏面側ではすり鉢状に大きく孔が広がる。厚さは3.0cm程、目玉状に隆起する部分で5.0cm程で全体に薄手である。外縁は平縁で1.0cm程突出する。側面や裏面はナデにより平坦に仕上げられている。色調は灰白色で、胎土は砂粒が多く低じり、焼成は軟質である。南滋賀町廃寺では出土しておらず、同寺で使用されたものかは不明である。

xiii 崇福寺跡（滋賀郡：大津市滋賀里町甲）

滋賀里の山中にあり、平安時代後期編纂の『扶桑略記』にある天智天皇勅願により大津宮の乾（北西）の方角に建立された崇福寺跡とされる。大津宮関連遺跡を探索する目的で昭和3年度・13～14年度に調査がおこなわれた。谷川を隔てた3つの尾根上の平坦部分（標高約242m）に主要伽藍が築かれる。北尾根に弥勒堂跡、中尾根に塔跡と小金堂跡が東西に並び、地中に残る塔心礎から舍利容器が出土した（柴田 1941）。南尾根では金堂・講堂とみられる建物跡が確認されるが、その主軸方位は北・中尾根のものとやや異なり、北

尾根・中尾根の建物が崇福寺、南尾根は 786 年に桓武天皇によって創建された梵釈寺の遺構と考えられている。白鳳～平安時代の瓦が出土する。

鬼瓦 1～2（鬼面文） 2 種類の鬼瓦が報告されている（柴田 1941、図版 69）。どちらも丸山（中尾根）小金堂跡の東方で出土したという鬼面文鬼瓦であるが、詳細な出土状況は不明である。

鬼瓦 1（第 40 図）は、脚部が欠け、上半部のみが残る。近江国府・近江国庁の鬼瓦 10（第 39 図）と同範とみられる。釘孔の痕跡はない。裏面は剥離してほぼ欠けているが、わずかに残る部分で厚さ 4.5cm、鼻柱部で最大厚 6.8cm である。色調は灰色～暗灰色、胎土は密で、焼成はやや硬質である。

鬼瓦 2（第 41 図）は、少なくとも 4 個体がある。全体はアーチ形で、下部はあまり広がらないようである。外縁に沿って直径約 2.9cm の大振りの珠文を約 0.2cm 間隔で密に並べる。目玉、眉間、鼻、頬部などが盛り上がり、内区全体に肉厚に鬼面を表している。上部には巻き毛を表す。上顎と上の歯牙にあたる形で抉りが入る。口はあまり上に広がらないようである。第 41 図 1 は上半部で、第 41 図 2 は顔面部分である。図版では並べて掲載したが、接合しない。既報告（柴田 1941）では、第 41 図 2 は掲載されていないが、その後、共に近江神宮に保管されていたもので、同時に出土していたものとみられる。第 41 図 3・4 は、それぞれ右側目玉の箇所を含む破片で、別個体とわかる。珠文は全体に范が大きくずれたのか、つぶれている。厚さは最大で 5.5cm。裏面は平坦に整えられている。色調は薄灰色で、一部に暗灰色がかかる。胎土は密で、焼成はやや軟質である。

xiv 穴太廃寺（滋賀郡：大津市穴太二丁目ほか）

穴太廃寺は、大津宮中枢部から北東へ約 3 km 離れて位置する。7 世紀中頃とみられる単弁八弁蓮華文軒丸瓦が出土したことで、前期穴太廃寺の存在も想定されている。伽藍配置が確認されているのは後期穴太廃寺で、7 世紀後半の大津宮にやや先行して創建され、大津宮造営以降に再建されたとみられる。再建寺院の伽藍建物は真北に主軸を取って建て替えられており、大津宮中枢部建物の向きに合わせたものと考えられている。なお、鴟尾は、段型が表現されるものが大小 2 個体以上、無文の鴟尾とみられる個体もあり、2 種類以上が確認できる（滋賀県教育委員会 2001）。

鬼瓦 1（鬼面文） 鬼瓦とされる小片 1 点（第 43 図）が、再建寺院金堂跡北側 から出土している。今回は実見できていないが鬼面の鼻～両目じりとみられる部分の破片で、粘土塊の繋ぎ目痕があるという。色調は橙色、胎土は砂質、焼成は軟質と報告される。

（福庭万里子）

D おわりに

①概要

近江国には 23 の鬼瓦出土遺跡がある。このうち白鳳期は 12 遺跡、奈良・平安時代は 11 遺跡を数える。前者は近江国北部を中心に分布し、後者は近江国南部を中心に分布する。他方、白鳳期の近江国には 22 の鴟尾出土遺跡があるものの、奈良・平安時代の鴟尾を出土する遺跡はない。このことをふまえて近江国全域を概観すると、建物の棟端等の雨仕舞に用いた瓦には次のような特徴が認められる。

1. 白鳳期の近江国南部、とりわけ滋賀郡と栗太郡南部では鬼瓦は出土せず、もっぱら鴟尾が用いられた。
2. 白鳳期の近江国北部を中心とする範囲では鴟尾も鬼瓦も出土するが、同一遺跡から両方とも出土する例は、窯跡の可能性もある磯堂谷遺跡（第 2 図）のみであり、近江国全域を見ても現状では原則として同一遺跡からは鴟尾か鬼瓦かのどちらか一方しか出土していないといえる。したがって、近江国では同一建物において大棟と隅棟とで鴟尾と鬼瓦を使い分けたり、同一伽藍に鴟尾所用建物と鬼瓦所用建物とが並存したりするようなことはなかったと考えられる。
3. 奈良・平安時代の近江国では鴟尾は出土せず、南部を中心として鬼瓦が出土する。
4. 奈良時代には近江国府跡を中心に飛雲文鬼瓦が分布するほか、崇福寺跡等では鬼面文鬼瓦が散見される。
5. 奈良時代末頃以降は、近江国府跡でも飛雲文鬼瓦は出土せず、鬼面文鬼瓦しかみられなくなる。

（北村圭弘）

②白鳳期の様相

近江国における鬼瓦の初現は 7 世紀後半代の白鳳期とみられる。このうち、安土廃寺鬼瓦（第 7 図）は主文に素弁蓮華文を配置するから、近江ではいちおう最古相を示すと考えられる。次に八島廃寺鬼瓦（第 1 図）の主文蓮華文は同遺跡出土の山田寺式軒丸瓦と同文であり、素文鬼瓦（第 3 図）を出土した三大寺廃寺についても創建瓦は山田寺式軒瓦である。同じく素文鬼瓦（第 4 図）を出土した鳥籠山遺跡では山田寺式軒丸瓦が多く出土したほか、川原寺式軒丸瓦も出土した。

観音堂廃寺鬼瓦（第 14 図）については、主文は素弁蓮華文であるが、外区斜縁の面違鋸齒文や中房の蓮子構成に同遺跡出土の川原寺式軒丸瓦との関係がうかがわれる。また、幾何学文鬼瓦（第 5 図）を出土した下岡部廃寺では川原寺式軒瓦と檜隈寺式軒瓦とが近い関係にあった。小八木廃寺鬼瓦（第 6 図）についても湖東式軒丸瓦が組み合う可能性が高く、7 世紀第 IV 四半期におさまると考えられる。六条薬師堂遺跡鬼瓦（第 11 図）については主文蓮華文と同文の軒丸瓦が偏向唐草文軒平瓦と組み合うことから、藤原宮期の所産と考

えられる。

ところで、山本忠尚氏は小八木廃寺鬼瓦（第6図）について日本における鬼面文鬼瓦の初現である可能性を指摘している（山本 1979、p. 144）。柿田遺跡軒丸瓦もほぼ同時期の所産と考えられるが、両者の鬼面文の面貌はまったく異なる。後者は三国時代新羅に系譜づけられる獣面文とされる一方（山本 1998、p. 37）、小八木廃寺鬼瓦の面貌は人面に近い。山本氏は額上の山形表現や舌出し表現が中国華北の舌出し獣面と近似するという（山本 1979、p. 144）。左右の眼球下の頬骨ないし上顎骨が発達した面貌は、確かに中国大陸の北方民族を初佛とさせる。

一方、八島廃寺鬼瓦（第1図1～2）は組み合う竹ヶ鼻廃寺系列の山田寺式軒丸瓦の先後関係から、三大寺廃寺鬼瓦（第3図）よりも新しい。したがって、小八木廃寺鬼瓦や柿田遺跡軒丸瓦の年代を遡ることもないだろうが、四隅の鬼面文の面貌は人面であり、頭頂が尖り左右に突起があるという点で小八木廃寺鬼瓦と似る。山本氏は小八木廃寺鬼瓦の鬼面文の額上の3本の突起の左右を耳と見て、中央の突起を一角とする意見、3本の突起の左右を双角と見て、中央の突起を博山（海中にそそりたつ仙人が住むという山）に見立てる意見を示している（山本 1979、p. 94）。頭頂が尖ったような表現は、弥生時代ではシャーマンとされる人物像の描写と似てなくもない。（北村圭弘）

③奈良・平安時代の様相

奈良時代の鬼瓦については、近江国府創建期の飛雲文鬼瓦の使用に始まり、その後、鬼面文鬼瓦が採用されるとみられる。

飛雲文鬼瓦 近江国府の創建年代は8世紀中頃に比定され、軒丸瓦・軒平瓦等の出土状況の検討から、創建期である8世紀中頃～後半に製作されていたのが飛雲文軒瓦であったと考えられる（平井 2006）。飛雲文鬼瓦も、この軒瓦とセットで使用されたといえる。また、近江国府関連施設は短い期間のうちに建造され、そこに使用された飛雲文軒瓦の年代幅は8世紀後半の第3四半期を中心とすると推定されている（中西 2010）

平井氏は、近江国府系の主な飛雲文鬼瓦について、文様からみた変遷の流れと、軒丸瓦・軒平瓦との組み合わせの想定を検討した（平井 2010）。それによると、本稿掲載の第17図（近江国庁・鬼瓦2）が最も古相を示し、これと蓮子の配置が共通する第15図（近江国庁・鬼瓦1）も同時期とされ、第17図・第15図→第16図（近江国庁・鬼瓦1）・第21図（惣山遺跡）→第19図（近江国庁・鬼瓦4）の流れとされている。

なお、飛雲文の文様配置に関しては、近江国府系飛雲文鬼瓦の外区に5～6個配置される飛雲文は、本稿の鬼瓦4（第19図）を除き、いずれも雲尾は上方の飛雲文の雲尾側に向かって伸びていく。しかし、近江国府系飛雲文軒丸瓦・軒平瓦の場合は、飛雲文の雲尾を次の雲頭に向かって高く上げている。雲尾先端を次の雲尾側に伸ばすという点だけみると、むしろ南滋賀町廃寺系の飛雲文軒丸瓦における飛雲文の配置に近い。

近江国府系飛雲文鬼瓦の固定装置は、蓮華文中央部の直径約1.5cmの円形釘孔がみられ

るのみで、裏面は確認される限り平坦に仕上げられている。いずれも下部の挟りは、中央と左右の3か所に入る。

さて、南滋賀町廃寺系飛雲文瓦は、同寺を中心に分布し、瀬田地域への供給がみられないことや製作方法が異なることから、近江国術の管理下で国府の瓦を製作した工人とは別系譜の工人によって作られたものと指摘されている（中西 2010）。年代は、蓮華文や飛雲文のつくりから近江国府系飛雲文よりもやや先行するとみることできる。一方、橙木原瓦窯跡の調査では、飛雲文軒丸瓦と鬼瓦はB - 2号窯にともない出土するが、この堆積層は1・3号窯からの流入もみられ、2号窯で焼成された確証はないという。また、2号窯からは平安時代に属する土器も出土するが、平瓦の調整技法にはそこまで下げがたい点があること、飛雲文について特に軒平瓦が近江国府系よりも古調を示すといえることなどから、おおよそ奈良時代後半～平安時代初葉と推定されるにとどめられている（滋賀県教育委員会 1975a・1981）。固定装置は、裏面の加工は特になく、蓮華文中央に一辺約4.7cmの方形孔をあける例が多いが、方形孔のないものもある。挟りは下部中央に半円形に入れる。

鬼面文鬼瓦 鬼面文鬼瓦は、近江国府関連遺跡や、南滋賀町廃寺周辺では、飛雲文鬼瓦に後出して使用されたとみられる。出土量は飛雲文鬼瓦と比べると少ない。全容が推定できるものに関してまとめると以下のようになる。

橙木原瓦窯跡出土の鬼面文鬼瓦（第42図）については、飛雲文鬼瓦と同様にB - 2号窯やA支群灰原から出土しており（滋賀県教育委員会 1975a・1981）、奈良時代後半～平安時代初めの範囲と推測できるが、類例の発見と検討を待ちたい。固定装置として、直径約1.2cmの円形釘孔をもつ。

近江国庁跡と崇福寺跡では、南都七大寺系の鬼面文鬼瓦（第39・40図）が出土する。同範とみられ、崇福寺跡出土品は裏面がほぼ欠けているが、どちらも釘孔などの固定装置は確認できない。年代は、近江国庁跡の調査結果（滋賀県教育委員会 1999）からは、奈良時代中頃～平安時代初めの範囲といえる。崇福寺跡のもう1種類の鬼瓦（第41図）も、これに続く時期にあたるとみられる。

また、全体に鬼面をあらわし、周縁に段と珠文帯をめぐらすことが特徴的な一群がある。石山国分遺跡（第31図）、南滋賀町廃寺（第33図）、近江国庁跡（第36図）の出土例があり、石山寺所蔵品にも大津市・建部大社出土と伝わる類例（第34図）がある。石山国分遺跡出土品からは、周縁の段は頂部で向きを切り替えしていたものとわかる。また、南郷田中瓦窯の表採品として、同様の鬼面文様で周縁の段表現をなくして縁を前方へ突出させた例がある（第32図）。南郷田中瓦窯で製作され、近江国府関連施設や南滋賀町廃寺へ供給されていた可能性がある。年代に関しては、軒瓦の供給関係から推定してみたい。石山国分遺跡出土の平安期の瓦は、同範および同範の可能性が高いものが近江国内で出土しているが、石山国分遺跡軒丸瓦 NM 08 と NM 10 が、南郷田中瓦窯と南滋賀町廃寺でも確認されている（大津市教育委員会 2013 の図 51）。これらは9世紀初頭～中頃のものと考えられ

ており、鬼瓦についてもこの年代が参考になるだろう。また、周縁に段と珠文帯を配する例は、9世紀の平安宮内裏跡出土品があり、その影響を受けたとみられる。ただし、段のめぐる向き（正段・逆段）や鬼面の様相については異なっている。（福庭万里子）

（滋賀県文化スポーツ部・野洲市教育委員会・大津市歴史博物館）

謝 辞

本稿を作成するにあたり、下記のみなさまに資料調査にご協力、ご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

近江神宮、大津市歴史博物館、大津市埋蔵文化財調査センター、滋賀県埋蔵文化財センター、高浜市やきもの里かわら美術館、長浜市長浜城歴史博物館、東近江市埋蔵文化財センター、彦根市、米原市教育委員会、野洲市教育委員会（県市町ごとに五十音順）。

青山 均、磯崎 清、牛谷好伸、小竹志織、杉浦隆支、高橋順之、田中久雄、内藤 京、福井智英、三尾次郎（五十音順）。

註

- 1 昭和63年（1988）頃、西田弘氏にご教示いただいた。
- 2 近年、寺域の発掘調査で同範の鬼瓦の破片が出土したとされるが（岩戸2015a、p.229）、そうした事実は確認できない。
- 3 長尾瓦窯跡出土の完形品の瓦当面は縦21.0cm、横23.0cmである（滋賀県教育委員会1981『橙木原遺跡発掘調査報告書Ⅲ－南滋賀廃寺瓦窯－（本文編）』p.207）。
- 4 第1図2はこの中心蓮子の位置に小孔がある（後述）。
- 5 山本忠尚氏は「顔面部のみを範でつくったのではなく、全表面を打ちこみ、四周をヘラで削って整えた」と観察したこともある（山本1979、p.144 註3）。
- 6 梅原1951のP85第2図「慶州出土鬼板復元形1、3」とp.87第4図「近江安土出土鬼板復元図約1、3」はキャプションが入れ替わっているとみられる。このことは井内功氏も指摘している（井内1969、p.16）。
- 7 修正点は蓮華文の花弁の形状変更、同中房蓮子の周環を消去、中央列の上下の蓮華文の界線を変更など。修正後に石膏模型がつくられている（滋賀県立琵琶湖文化館蔵）。
- 8 飛雲文瓦については、古代瓦研究会第17回シンポジウムで取り上げられ、近江国府系と南滋賀町廃寺系の飛雲文瓦の中で鬼瓦の様相も報告されている（田中2018）。
- 9 石山寺には、江戸時代の中頃、寛政9～11年（1797～1799）にかけて石山寺の尊賢僧正（知足庵）が収集・編纂した『古瓦譜』が伝わる。収録された瓦の一部は実物も残っており、いずれも石山寺所蔵品である。鬼瓦（第34図）は、建部大社出土と伝わる（青山2008）。

参考文献（執筆者五十音順、発行年順）

- 青山 均 2008「石山寺知足庵コレクション（古瓦・古瓦譜）について」『大津市歴史博物館研究紀要15』
- 井内 功 1969「古代棟端飾瓦の固定方法」『井内古文化研究室報』2
- 井内古文化研究室 1968『鬼面紋瓦の研究』
- 井内古文化研究室 1998『漢日古瓦図録』
- 石田茂作 1937「白鳳時代寺院址三題」『考古学雑誌』第27巻第10号
- 石田茂作・稲垣晋也 1970『飛鳥白鳳の古瓦』奈良国立博物館
- 岩戸晶子 2001「＜論説＞奈良時代の鬼面文鬼瓦：瓦葺技術からみた平城宮式鬼瓦・南都七大寺式鬼瓦の変遷」『史林』84（3）
- 岩戸晶子 2015a「14 蓮華文鬼瓦 八島廃寺出土 一箇」『開館120年記念特別展 白鳳－花開く仏教美術－』奈良国立博物館

- 岩戸晶子 2015b「17 軒丸瓦・軒平瓦 地光寺跡出土 各一箇」『開館 120 年記念特別展 白鳳－花開く仏教美術－』
奈良国立博物館
- 宇野茂樹 1953「蒲生・神崎美術略史」『近江文化史 蒲生・神崎 1』近江文化史刊行会
- 梅原末治 1951「近江安土山麓出土の鬼板の復元」『史迹と美術』第 21 卷 3 号
- 大津市歴史博物館 2008『かわら－瓦からみた大津市－』大津市歴史博物館企画展図録
- 大津市歴史博物館 2017『大津の都と白鳳寺院』大津市歴史博物館企画展図録
- 梶原義実 2002「最古の官営山寺・崇福寺（滋賀県）－その造営と維持－」『佛教芸術』265 号
- 木村捷三郎 1941「本邦に於ける堤瓦の研究 附 所謂鬼板の始原について」『仏教考古学論叢 考古学評論第三輯』
東京考古学会
- 加茂正典 2006「鈴鹿家亀ト関係資料」（東アジア恠異学会編『亀ト 歴史の地層に秘められたうらないの技をほ
りおこす』臨川書店）
- 草津市史編さん委員会 1981『草津市史 第一巻』草津市役所
- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996『木村捷三郎収集瓦図録』
- 坂田郡教育会 1941『改訂近江国坂田郡志第 3 卷上』P 853
- 関根龍雄 1940「本邦上代の鬼瓦に就いて」『考古学雑誌』第 29 卷第 5 号
- 高橋美久二 2007「古墳から寺院へ」『新修彦根市史第 1 巻』彦根市
- 田中久雄 2018「近江の飛雲文軒瓦 1」『古代瓦研究 8 東大寺式軒瓦の展開：飛雲文軒瓦の展開』国立文化財機構
奈良文化財研究所編
- 中西常雄 2010「近江系飛雲文軒瓦の年代と背景」『考古学研究』第 57 卷第 1 号（通巻 225 号）
- 西田 弘 1989「八島廃寺」『近江の古代寺院』同刊行会
- 林 博通 1998『古代近江の遺跡』サンライズ出版
- 平井美典 2006「近江国府創建期の瓦について」『淡海文化財論叢』第 1 号
- 平井美典 2010『藤原仲麻呂がつくった壮麗な国庁』洋泉社
- 平井美典 2011「付論一 飛雲文瓦からみた近江国府の創建」『大国近江の壮麗な国府』滋賀県立安土城考古博物館
第 42 回企画展図録
- 山本忠尚 1979「舌出し獣面考」『奈良文化財研究所学報第 35 冊 研究論集 V』奈良国立文化財研究所
- 山本忠尚 1998『日本の美術 No. 391 鬼瓦』
- 吉澤 悟 2015「6 蓮華文鬼瓦」『月刊文化財 625 号』第一法規株式会社

発掘調査報告書

- 大津市教育委員会 2007『南滋賀町廃寺発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財調査報告書 42
- 大津市教育委員会 2009『近江国府関連遺跡発掘調査報告書 IV 惣山遺跡』大津市埋蔵文化財調査報告
書 47
- 大津市教育委員会 2012a『惣山遺跡・近江国府跡発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財調査報告書 60
- 大津市教育委員会 2012b『近江国府関連遺跡発掘調査報告書 VI - 近江国府跡・国庁跡東隣接地の調査 -』大津市
埋蔵文化財調査報告書 62
- 大津市教育委員会 2013『石山国分遺跡発掘調査報告書 II』大津市埋蔵文化財調査報告書 69
- 大津市教育委員会 2014『青江遺跡発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財調査報告書 79
- 蒲生町教育委員会 1989『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 I』蒲生町文化財資料集 7
- 滋賀県教育委員会 1961「瀬田廃寺跡発掘調査報告」『滋賀県史蹟調査報告 第 12 冊』
- 滋賀県教育委員会 1975a『橙木原遺跡発掘調査報告 - 南滋賀廃寺瓦窯 -』
- 滋賀県教育委員会 1975b「大津市瀬田堂ノ上遺跡調査報告」『昭和四十八年度 滋賀県文化財調査年報』
- 滋賀県教育委員会 1976「湖東町小八木廃寺調査報告」『昭和四十九年度 滋賀県文化財調査年報』
- 滋賀県教育委員会 1977a『滋賀県文化財調査報告書第 6 冊 史跡 近江国術跡発掘調査報告』
- 滋賀県教育委員会 1977b「大津市瀬田堂ノ上遺跡調査報告 II」『昭和五十年年度 滋賀県文化財調査年報』

滋賀県教育委員会 1978『昭和五十一年度 滋賀県文化財調査年報』

滋賀県教育委員会 1981『橙木原遺跡発掘調査報告書Ⅲ－南滋賀廃寺瓦窯－』

滋賀県教育委員会 1989『柿田遺跡発掘調査報告書－県道中山東上坂道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 7

滋賀県教育委員会 1994『錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅷ 付・南郷田中瓦窯跡・石山寺境内遺跡発掘調査概要』

滋賀県教育委員会 1997『土地改良総合整備関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ－1 屋中寺廃寺』

滋賀県教育委員会 1999『近江国府跡Ⅰ 大津市三大寺』

滋賀県教育委員会 2001『一般国道 161 号（西大津バイパス）建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』

滋賀県教育委員会 2004『史跡近江国庁跡 附惣山遺跡・青江遺跡調査整備事業報告書Ⅱ』

滋賀県教育委員会 2007『史跡近江国庁跡 附惣山遺跡・青江遺跡調査整備事業報告書Ⅲ』

滋賀県教育委員会 2017『県道安養寺入町線補助道路整備工事に伴う発掘調査報告書 安養寺遺跡』

柴田 貫 1940『滋賀県史蹟調査報告第9冊 大津京趾（上）南滋賀の遺跡とその遺物』滋賀県史蹟名勝天然紀念物調査会

柴田 貫 1941『滋賀県史蹟調査報告第10冊 大津京趾（下）崇福寺趾』滋賀県史蹟名勝天然紀念物調査会

中主町教育委員会 1997『平成6・7年度中主町内遺跡発掘調査年報』

彦根市教育委員会 1992『鳥籠山遺跡発掘調査概要報告書』

肥後和男 1929『滋賀県史蹟調査報告第2冊 大津京趾の研究』滋賀県史蹟名勝天然紀念物調査会

米原町教育委員会 1984『三大寺遺跡群』米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

野洲市教育委員会 2006『野洲市内遺跡発掘調査集報Ⅱ』

野洲市教育委員会 2021『野洲市文化財調査概要報告書』

図版出典

第1図1写真：石田・稲垣 1970 No.534-2（実測図は北村トレース）、第1図2写真：井内古文化研究室 1998 p.123 No.153。第1図参考復元図：石田・稲垣 1970 No.534-1・2 より北村が作成。

第2図写真：北村撮影。

第3図拓本・実測図：北村作成。

第4図拓本・実測図：北村作成。

第5図1・2拓本・実測図：滋賀県教育委員会 1997 p.49（断面図は北村トレース）。

第6図拓本：北村作成。写真・実測図：滋賀県教育委員会 1976 図版 30、p.78 第4図（断面図は北村トレース）。

第7図1・2拓本・実測図：梅原 1951 p.84（拓本は北村が色調補正、断面図は北村トレース）。

第8図1～5拓本：北村作成。第8図1～5拓本：北村作成。第8図1～5実測図・同7～8拓本・実測図：滋賀県教育委員会 2017 p.147（断面図は北村トレース）。第8図6拓本・実測図：財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 図版 77（断面図は北村トレース）。

第9図：蒲生町教育委員会 1989 p.116（断面図は北村トレース）。

第10図：滋賀県教育委員会 1989 図版 114（断面図は北村トレース）。

第11・12図：野洲市教育委員会 2021 p.39。

第13図：野洲市教育委員会 2021 p.39。

第14図拓本・実測図：滋賀県教育委員会 1978 図版 218、写真：岡山撮影。

第15図拓本：滋賀県教育委員会 1977a 図面 20。写真：福庭撮影。

第16図：滋賀県教育委員会 2004 p.124 第90図。

第17図：滋賀県教育委員会 1977a 図面 20（拓本のうち復元部分を明確にするため一部加筆）。

第18図：滋賀県教育委員会 1977a 図面 20。

第19図：滋賀県教育委員会 2007 p.28 第25図（脚部断面は省略）。

第20図：大津市教育委員会 2012b p.13。

第21図：大津市教育委員会 2009 p.34 図26（※なお、拓本は同報告書 p.32～33掲載 31～48の拓本を合成し

て全体像を復元したもので1個体ではない)。

第22図：大津市教育委員会 2014 p.22 図13。

第23図：滋賀県教育委員会 1961 図版10。

第24図：滋賀県教育委員会 1977b 図版37。

第25図：滋賀県教育委員会 1975b p.25。

第26・27図：滋賀県教育委員会 1975a 図版71（なお、第26図は拓本のうち復元部分を明確にするため一部加筆）。

第28図：大津市教育委員会 2007 p.15 図9。

第29図：高浜市やきものの里かわら美術館蔵。写真：福庭撮影。

第30図：滋賀県教育委員会 1975a 図版60 及び滋賀県教育委員会 1981（図版編Ⅱ）図版148。

第31図：大津市教育委員会 2013 p.47 図42。

第32図拓本：滋賀県教育委員会 1977a p.41。写真：福庭撮影。

第33図：近江神宮蔵。写真：福庭撮影。

第34図：青山 2008 p.64 図14。

第35図：滋賀県教育委員会 1977a 図面20。写真：福庭撮影。

第36～38図：滋賀県蔵。写真：福庭撮影。

第39図実測図：滋賀県教育委員会 1999 p.32 図18。写真：福庭撮影。

第40・41図：近江神宮蔵。写真：福庭撮影。

第42図：滋賀県教育委員会 1981（図版編Ⅱ）図版149・152。

第43図：滋賀県教育委員会 2001 p.193 図148・図版16。

【執筆分担】

- ・北村圭弘：A、B、C 文頭、D ①・②
- ・福庭万里子：C iv～x iv、D ③
- ・岡山仁美：C i～iii

第1図 八島廃寺遺跡出土鬼瓦（1：4）

第2図 磯堂谷遺跡出土鬼瓦（1：4）

第3図 三大寺廃寺遺跡出土鬼瓦（1：4）

第5図 下岡部廃寺出土鬼瓦（1：4）

第4図 烏籠山遺跡出土鬼瓦（1：4）

第6図
小八木廃寺
出土鬼瓦
(1 : 4)

第7図 安土廃寺出土鬼瓦（1：4）

第9図 野瀬遺跡出土
鬼瓦（1：4）

第8図 安養寺廃寺出土鬼瓦（1：4）

第10図 柿田遺跡出土
鬼面文軒丸瓦（1：4）

第 11 図 六条薬師堂遺跡出土鬼瓦（1：4）

第 12 図 六条薬師堂遺跡
出土軒丸瓦（縮尺任意）

第 13 図 八夫西ノ後遺跡出土鬼瓦（1：4）

第 14 図 下寺観音堂遺跡出土鬼瓦（1：4）

第 15 図 近江国府・近江国庁跡 鬼瓦 1 (1 : 4)
〔近江国庁跡 (政庁) 出土〕

第 16 図 近江国府・近江国庁跡 鬼瓦 1 (1 : 4)
〔近江国庁跡 (東郭) 出土〕

第 17 図 近江国府・近江国庁跡 鬼瓦 2 (1 : 5)
国庁跡 (政庁) 出土

第 18 図 近江国府・近江国庁跡
鬼瓦 3 (1 : 5)
〔近江国庁跡 (政庁) 出土〕

第 19 図 近江国府・近江国庁跡
鬼瓦 4 (1 : 5)
〔近江国庁跡 (政庁北方) 出土〕



第 20 図 近江国府・近江国庁跡 鬼瓦 5 (1 : 4)
〔近江国庁跡 (東郭隣接地) 出土〕

n

第 21 図 惣山遺跡 鬼瓦 1
(1 : 4)

※複数個体の拓本を合成して
復元配置したもの

第 23 図 瀬田廃寺 鬼瓦 1 (1 : 4)

第 22 図 青江遺跡 鬼瓦 1 (1 : 4)

第 24 図 堂ノ上遺跡 鬼瓦 1 (1 : 4)

第 25 図 堂ノ上遺跡 鬼瓦 2 (1 : 4)

第 26 図 南滋賀町廃寺 鬼瓦 1 (1 : 5)〔金堂跡東方出土〕

第 27 図 南滋賀町廃寺 鬼瓦 1 (1 : 5)
〔大正 14 年表採品〕

第 28 図 南滋賀町廃寺 鬼瓦 1 (1 : 5)
〔寺域西辺出土〕

第 29 図 南滋賀町廃寺 鬼瓦 1 (1 : 5)
〔伝南滋賀廃寺出土〕

第 30 図 檀木原瓦窯跡 鬼瓦 1 (1 : 5)

第 31 図 石山国分遺跡 鬼瓦 1 (1 : 4)

第 34 図 石山寺所蔵鬼瓦 (1 : 4)
(参考資料)

第 35 図 近江国府・近江国庁跡
鬼瓦 6 (1 : 4)
〔近江国庁跡 (政庁) 出土〕

第 32 図 南郷田中瓦窯 鬼瓦 1 (1 : 4)

第 36 図 近江国府・近江国庁跡
鬼瓦 7 (1 : 4)
〔近江国庁跡 (政庁) 出土〕

第 33 図 南滋賀町廃寺
鬼瓦 2 (1 : 4)

第 37 図 近江国府・近江国庁跡
鬼瓦 8 (1 : 4)
〔近江国庁跡 (政庁) 出土〕

第 38 図 近江国府・近江国庁跡
鬼瓦 9 (1 : 4)
〔近江国庁跡 (政庁) 出土〕

第 39 図 近江国府・近江国庁跡 鬼瓦 10 (1 : 4)
〔近江国庁跡 (政庁南西隣接地) 出土〕

第 40 図 崇福寺跡 鬼瓦 1 (1 : 4)
〔中尾根出土〕

第 41 図 崇福寺跡 鬼瓦 2 (1 : 4) 〔中尾根出土〕

第42図 榎木原瓦窯跡 鬼瓦2 (1:4)

第43図 穴太遺跡 鬼瓦1 (1:4)